

ろ こうきやうげつ
盧溝曉月 けんりゅうてい あいしんかくらこうれき
乾隆帝(愛新覺羅弘曆)

ぼうてん かんけい いあく な
茆店の寒鶏 呷喔と鳴き
茆店寒鶏呷喔鳴

しやうひやう しゃかん しんおう ほつ
曙光に 斜漢 参横たらんと欲す
曙光斜漢欲参横

はんごう りゅうしやう さんしゅうあわ
半鈎は留照して 三秋澹く
半鈎留照三秋澹

いっとう なみ わ きやうめい はさ
一竦は波を分かち 鏡明に夾まるる
一竦分波夾鏡明

じやう い のうそう こころとも いん
定に入れる衲僧は 心共に印し
入定衲僧心共印

てい おほ かくし かげ なおおとろ
程を憶ゆる客子は 影に猶驚く
憶程客子影猶驚

じらい こうせい みち ふ こと
邇来 溝西の道を踏むる毎
邇来毎踏溝西道

けい ふ な わす あんじ じやう
景に触れ 那んぞ忘れん 黯爾の情
触景那忘黯爾情

※底本：『漢詩体系 第二十二巻 清詩選』二〇六頁より原文転載。
◎熱田図書館が漢字の一部を通用字体に改め、ルビを付し、書き下し文を作成しました。

【大意】

茅葺屋根の店で夜明けの鶏がうめき声で鳴き、白みかかる空には、(西に)銀河(斜漢)と、(東に)横たわろうとするオリオンの三ツ星がみえる。

ねじれた上弦の月が照り残り、秋の気配が淡くただよう。虹の橋が波を分け、鏡のような明るい水面に挟まれる。

悟りに入った禅僧は、この景色をただ心に刻み、道程を振り返る旅人は、水面に映る自分の影に驚くだろう。

この景色を見て以来、この橋より西の道へ行こうとするたび、景色に触れると、暗然たる離別の情が抑え切れなくなる。

【解説】

日本人には昭和二二(一九三七)年七月七日の盧溝橋事件でお馴染みの盧溝橋は、北京の西南約一五キロにある石橋です。今は、流れも止まり、まるで湖のような永定河ですが、かつて流れが急だった旧盧溝河に一一九二年に架けられました。日本では源頼朝が征夷大將軍になった年です。マルコ・ポーロが『東方見聞録』で、「世界中どこを探しても匹敵するものがない」と見事さを称えたため、欧米では「マルコ・ポーロ・ブリッジ」と呼ばれています。

明け方の盧溝橋にねじれた上弦の月が照り残る「盧溝曉月」の景観は、北京八景のひとつに挙げられ、中国では古来、詩に詠まれてきました。中でも盧溝橋端に石碑が残る乾隆帝の詩は、特に有名です。

清の第六代乾隆帝(一七一一～九九九年 在位一七三六～九六年)は、幼少の頃から文武に優れ、政治、文学に大きな足跡を残しました。七言律詩「盧溝曉月」は、乾隆一六(一七五二)年、四〇歳の作です。